
とある災厄の幻想殺し《イマジンプレイカー》

シラッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある災厄の幻想殺し《イメージンブレイカー》

【Nコード】

N6945U

【作者名】

シラッチ

【あらすじ】

上条当麻はとにかく不幸な少年だった。今日も当たり前のように事件に巻き込まれ
上条さんの性格が鬼
畜だったら というIFのお話です

七月十九日

七月十九日。

その日上条当麻という少年は不幸だった。

歩道を歩いていけばトラックに突っ込まれ、建設中のビルの下を歩いていけば鉄骨が落ちてくる。そしてこれ以上の不幸を避けようとわざわざ遠回りして裏路地を通ればスキルアウト同士の抗争に巻き込まれて拳銃をぶちこまれる始末だった。

しかし、これだけの不幸も彼にとっては日常茶飯事の事だった。それだけ上条当麻という人間は不幸にまみれている人物なのだ。

「苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア……これにすつか」

腹を満たす予定だったファミレスの中で上条は珍しく短時間で注文する品が決まった。何だか今日は珍味が食べたくなる気分だったのだ。

ウェイトレスを呼んだ後の退屈な時間を過ごしていると、何やら後ろが騒がしくなってきた。

「お兄さん幻想御手^{レベルアップ}って知らない？」

「知らない事はねえけどよ……タダってわけにはいかねーぜ？」

「まあ君の場合、俺が欲しいのは体かな？ あっはははは！」

耳にするのさえ煩わしい数人の汚らしい男の声だった。

話の内容から察するに幻想御手という物欲しさに女の子が不良グループ（声から大体察した）に接触したのだろうか？

（レベルアップって何だ？ 聞いたことねえな……っと、そんな事はどうでもいいか。とにかく関わり会わないようにしよう）

軽く頭を振って気持ちを『苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア』に気持ちを切り替える。早く料理運んでこいよと苛立ち始めたその時、上条のポケットに入れていた携帯電話が振動し始めた。

「はあ、と溜め息を吐きながら携帯を耳に当てる。

「ヒロシ、ちゃんとお母さん口座にお金を振り込んだからね」

完全なる間違い電話だった。しかも恐らく電話相手は詐欺に引っかけられている可能性大である。

速攻で通話を切ったのとスキンヘッドの兄ちゃんに「おい」と声を掛けられたのはほぼ同時だった。

「は？ 何でせうか？」

「お前……今誰と電話していた？」

「誰ってただの間違い電話」

「しらばっくれてんじゃねえ！！ テメエ今、幻想御手ってワード聞いて風紀委員ジャッジメントか警備員アンチスキルに通報しただろうが！！」

「ん？ 風紀委員ってこの時間帯に活動してたっけ」

検討違いな疑問を浮かべるキョトン顔をした上条の胸倉をスキンヘッド男は掴み上げる。

「ナメてんのか糞ガキい！！」

放たれた右ストレートが上条の頬を貫き、彼の体はテーブルの上に投げ出される。まだ料理が運ばれていなかったのがまさか幸となるとは彼は思わなかっただろう。

「おい、どうした」

騒ぎを聞き付けたのか、スキンヘッドの仲間らしき人物がぞろぞろと集まってくる。

「この糞ガキが警備員に通報しやがった」

「ああ？ 通報って幻想御手をか」

「マジで？ じゃあもう殺そうぜコイツ」

「つーわけだ。とりあえず表出よっか」

突き飛ばして上条を店の外に放り出してスキンヘッドの男は不敵

に笑う。

「じゃー取り敢えずお金出そうか？ あ、カードと通帳も忘れずにな」

ゲラゲラと笑いながらスキンヘッドは七人の仲間達と共に上条に近付く。

「はは」

ゆらりと立ち上がった上条の口元が歪む。

「全くもって不幸だ。店に入っても飯食えないのかよ。おまけに殴られるし」

何を言ってるんだコイツは、とスキンヘッドは上条に歩み寄る。

「殺せるもんなら不幸ってヤツを殺してみてえよ。この幻想殺し《イマジンプレイカー》でな。だからさあ」

右腕を振り上げる。

「その不幸をぶつ殺す」

それは楽しそうな顔だった。まるで試験明けに我慢していたテレビゲームをした時のような。そんな表情を顔に貼り付けたまま、上条はスキンヘッドの顔面に拳を突き立てる。

鼻柱を砕く感覚が拳に伝わり、スキンヘッドの体がノーバウンドで三メートル後方に飛んでいく。

「タカヒロ！」

「っ、てんめえ！」

お仲間の一人がサブバイバルナイフを振り上げてきたが、上条は逆にその手を右手で掴んで捻って無理矢理に骨を粉碎した。

声にもならない悲鳴を上げる男の手から滑り落ちたナイフを左手で上条がキャッチする。

「じめんな」

一応謝ってから男の鳩尾にナイフを突き刺す。

腹を押さえて倒れる男から後ろに控えている六人に目を移す。そ

の内の比較的上条の近くにいた一人がポケットから黒い物を取り出そうとしていた。

「おっせーよ」

左手からナイフを握る手を右手に移し、ナイフを投げ付ける。

「ぐああ!？」

男が取り出そうとしていた物が上条の足元に転がってくる。それはこの都市であり普及のしてないローテクな拳銃だった。

「おい、ま」

拾い上げた拳銃の狙いを定めて何の躊躇いもなく引き金を引く。

「あああッ!!!」

両足を撃たれ、もんどり打って男は倒れこんだ。

「あと五人でせうか？」

ギョロリと目を動かすとその内の四人は「助けてくれ」やら「警備員さん!」とか言いながら逃げしてしまった。

「……と思ったけどあと一人になっちまったな」

軽く笑いながら上条は拳銃をその辺に放り投げる。

「この、クソ野郎お! マジで殺してやる!!」

残った最後の一人、茶髪ロン毛の男の手には燃え盛る火の玉があった。それを見ても上条の楽しそうな表情は変わらない。

「俺は強能力者《レベル3》だあ! 能力者を相手にしちまったのがそもそもの間違いだったなあ! 死ねえええッ!!」

相手が勝ち誇った顔で火の玉を上条へと飛ばす。だがそれは、上条が右手を軽く振っただけで掻き消えてしまう。

「あー、ごめんごめん言っただけで掻き消えてしまったか。俺に能力は通用しねえんだ。このクソ忌々しい右手のせいだな」
イマジナリーカード

一応、種明かしをしてあげながら右手をぶらぶらさせ、上条は男に歩み寄る。恐怖で動けない男のから空きの腹に一発パンチをぶち込んで膝を折らせる。

「ん」

ガクガク体を震わせ始めた男の目の高さまでしゃがみこんで上条は右手を差し出す。脂汗にまみれた顔で眉を潜める男に舌打ちし、

「金、出せよ」

その言葉が地獄から響くような低いトーンに聞こえたロン毛は震える手で財布ごと差し出す。

「おーし。いい子だ」

財布を引ったくり、ついでに立ち上がる時に相手の顔を蹴り飛ばした上条の顔は清々しいまでの笑顔だった。

「一応言っとくけどもう二度と俺に関わんなよ。次、お前らの顔見掛けたら今度こそぶつ殺すから」

泡吹いて倒れているロン毛に笑顔でそう忠告し、上条はファミレスに戻るうとする。恐らく料理は既にテーブルの上に置かれているだろう。

「あ、その前にコイツらの財布も回収しとくか」

倒れている三人に目を向ける。その矢先。

数億ボルトに達する電撃の槍が上条に飛んできた。慣れた手つきで幻想殺しを使用して電撃を吹き散らした後、上条は電撃を放った犯人の方向を向く。

灰色のプリーツスカートにサマーセーターの常盤台中学の服を着た、整っているが活発そうな顔立ちをした女の子。

上条はこの人物を知っている。

「またお前か、ビリビリ中学生」

七月十九日（後書き）

もしも上条さんが異常に喧嘩強くておまけに鬼畜だったら面白いかな、と思って書いてみました。

上条さんがこんな性格なので必然的に原作がブレイクされると思います。

七月十九日～二十日

上条は呆れたようにそう呟いた。

ビリビリ中学生 御坂美琴が突然、電撃を放ってきてそれを軽く往なすというのは、もはや上条と美琴が出会った時の習慣になっ
てしまっていた。

思えばいつからコイツは俺に絡んでくるようになったかなー、と上条は身体中から紫電を放って臨戦態勢の美琴を見ながらのんびり
と思いつ出し始める。

「……んー」

THE・回想中

「うへへ、君かわういーね」

「……………」

そついや数人の不良にコイツが絡まれてて。

(うわあ。巻き込まれる前にさっさと通り過ぎよう)

「おい、なに見てるんだコラー!!」

「はあ」

「なっ!?! コイツ後ろ向いたまま俺の蹴りを受け止め…………どわっ
!」

気付いたら巻き込まれてて。巻き込まれた以上、正当防衛をする
のが癖になってしまつてて。

「不幸だー」

「びぶるちっ!?!」

んで、不良グループの内の一人に顔面パンチ入れてブツ飛ばした
ら。

「てめえ……」

「死ぬ覚悟は出来てるんだろうなああ!？」

「大体、お前ら恥ずかしくないの？」

「ああ？」

「お前らが声かけてた女見てみるよ。どう見てもガキじゃん主に胸
とか胸とか胸とか。」

「こんな貧相な体した女に欲情するとかお前らロリコン？ 上条さ
んはドン引きですよ」

「この野郎なめやがって!」

「やつちまえ!」

「おおおお!」

「はい、俺と喧嘩するなら覚悟しとけよ不幸が」

んで、数十秒で全員再起不能にして。

そして感謝とかされるの面倒臭いから颯爽と立ち去ろうとしたら。

「私が一番ムカついたのはテメエだゴルアアアアアアアッ!」

THE・回想終了

「あーそうだったな」

「何が『そうだったな』よ!! アンタのせいで幻想御手の聞き込
み失敗しちゃったじゃない。どうしてくれんのよ」

「はあ」

「何故自分がこんなに責め立てられなければならないのか、と上条
は真剣に思った。」

というか、こっちは実際殴られるとかしてるのにファーストコンタクトが殺人級の電撃って何なの？ ヤバいですよ女の子相手に闇条さんが覚醒しそうですよ。

「前から思ってたけどお前っておかしくね？」

「……………？ は、はあ！？」

「お前と初めて会った時ってさあ。俺はお前を結果として助けたよなあ」

「な、何をいつてんのアンタ。別に頼んでないし、あんな奴等自分でな、何とかできてたし」

「俺が言いたいのはそんなんじゃないんだよコラ」

上条が一步踏み出すと美琴はさっきまでの態度と一変して肩をビクリと震わせた。

構わずに上条は美琴へとどんどん歩を進める。

「普通だったら『ありがとう』とか言うだろ。それ言うどころかお前は俺に会う度に電撃をいつもいつも放ちやがって。

さっきもそうだよ。俺は不運にもさっきの馬鹿達に絡まれただけだろうが。しかも殴られたっていうのに『大丈夫？』の一言じゃなくて電撃……………マジで何なの？」

気付けば美琴はゴクリと唾を飲んでいた。

いつもの上条だったら電撃を弾いた後は軽口を叩いて去っていくだけだったのに。今は明確な怒りを顔に浮かばせてこちらに迫ってくる。

無意識の内に後退りをしていた美琴だったが、いつの間にか壁に背が付いてしまっていた。

（ヤバい……………怒ったコイツ滅茶苦茶ヤバい！ と、とりあえず謝らないと）

「え、あ……………えと、その、し、ごめん」

目尻に涙まで浮かべて謝罪をしようとした美琴だったが、時既に遅し。スイッチの入った上条はもう本人以外に止められない。上条の中身は現在どす黒い感情に支配されてしまっていた。

「今更謝るんです、か!!」

壁際まで美琴を追い詰めた上条は拳を彼女の顔面の数センチずれた場所に思い切り叩き込む。煉瓦作りの壁の一部が豪快に吹き飛ぶ。「大体お前中学生だよな? 高校生の俺にタメ聞いてんじゃねえよ」

ずいっとお互いの息が吹きかかる距離まで上条は顔を近付ける。本来なら赤面必須な状況だが、今の美琴の顔は青ざめ、脂汗まで滲んでいた。

(何、コイツの目……瞳は私を捉えてるけど私を見ていないみたい。嫌だ……怖い、怖い怖い怖い……ッ!)

「そんなにビビるなら最初から俺に絡むなよ。次もし、今みたいな態度取ったらどうなるか分かってるな? 俺は心優しいから特別にワンチャンくれてやんよ」

そう言っただけで踵を返した直後、後ろでドサリという物音が響いた。首だけ後ろに回して見てみると、美琴がペタンと地面に座り込んでいるのが確認出来た。

「ただだけ精神ダメージ食らってんだよ、と上条は鼻で笑い、再びファミレスの入り口へと赴く。」

(……俺を疫病神扱いして避けるどころか毎回毎回絡んでくる珍しい奴だったか……これでいい。

「というかウザったい絡みだったしそれに俺の近くにいますよ」
自嘲気味な笑いを浮かべたまま、ついつい上条は心の声の一部を口に出してしまう。

「不幸になっちまうからな……ん？」

何やら向こうから複数の足音が響いてくるのが聞こえてきた。そして上条は足音の正体が何かを直ぐに察知した。

「警備員か……！？ 飯なんか食ってる余裕は無いなクソツタレ」
「さっきぶちのめした不良達の一人が『警備員さん』とかほざきながら逃げていたが本当に通報されるとは。」

上条は闇の中を駆け抜けてその場を後にした。

「マジで不幸だ……」

七月十九日～二十日（後書き）

読者様、お許しください！（久々すぎる更新的な意味で）

次回の更新は作者が美琴さんに愉快なオブジェにされるのを回避で
きたらします

七月二十日

「うるせえ……ッ！」

携帯電話のコール音によって上条当麻は目を覚ました。

三分間程そのままにしていたがコール音は鳴り止まない。たまたまなくなった上条は携帯をひっ掴み電話先の相手を確認せず大声で怒鳴り付けた。

「朝っぱらからやつかましいわ！！ 電話する時間くらい考えやがれこのクソツタレが！！」

「上条ちゃん？」

「……げ、その幼女みたいな声は……」

「馬鹿だから今日補習です」

「不幸だ」

そういえば今日補習だったのを忘れていた。

上条は偽善を止め、良心も捨てようとしているが、人生まで捨てるようとは思っていない。学校にはなるべく毎日通うし、補習もきちんと受ける。

人生を自分が日頃不幸な目に会ってるからって振ってしまつのは、不幸に屈しているみたいで気に入らないという節が上条にはある。余程の事が無い限りこのスタンスは変わらないだろう。

「さて……まずは朝飯を食うか」

冷蔵庫の中を漁り焼きそばパンを取り出す。中には他の食材も眠っているが、上条は焼きそばパンだけで我慢する事にした。

冷蔵庫を閉めてその場で焼きそばパンのラップを外してモグモグ

しながら上条は次の行動に移る。

「今日は天気も良いし、布団でも干しとくか」

布団を丸めて抱えあげ、足先を使って窓と網戸を開けてベランダに出る。

「外は明るいのに俺のお先は真っ暗……なんつってな。ん？」

上条は目の前の光景に思わず目をパチクリさせた。だってそこには
布団を干すはずの場所に何故か干されている女の子が！

「Oh……」

思わず外国人みたいなため息を吐いてしまった上条は女の子を観察する。

銀髪の髪の毛、そして金糸の刺繍が織り込まれている白い修道服というコスプレにしか見えない格好。それがベランダの手すりの上で両手両足をぶらーんと真下に下げている。

「……………よし」

上条は約五秒考えた後、スルーする事に決めた。

これは何かの事故でこうなったに違いない。目を閉じてるが、死んでるわけでもないし、目を覚ましたらいずれどこかに行くだろう。空いているスペースに布団を干し、何事も無かったように部屋の中に戻る。

「おなかへ」

何か聞こえたような気がしたが上条は振り返らなかつた。勢いよく窓と網戸を閉める。

「さて、制服に着替えるか」

「おなかへった、って言ってるんだよ？」

ビクリ、と体が硬直する。恐る恐る後ろを振り向くとそこには例

のコスプレ(?)シスターが。

いつの間にか鍵の掛かってないベランダの窓から侵入してきたらしい。珍しく上条が凡ミスを犯したのだった。

「てんめえ！ 何人様の家に不法侵入してるんですか！！」

「おなかへった」

「……俺の言葉通じてる？」

「おなかへったんだよ！」

「……………お前は俺を怒らせた」

「な、何をするの！？」

頭の中で何かプチリと切れた上条は少女シスターの襟首を右手で掴んだ。そして猫のように軽々と少女を持ち上げるとズンズンと玄関へと歩き始めた。

だが七歩くらい歩いたところで突然、凄まじく重さが減った。

「あれ？」

見ると自分の手にあるのはあの少女が着ていた修道服。更に後ろを見ると。

「おいおいマジですか」

ハラリと下に落ちる修道服のフード部分。

……そして全裸になっている銀髪の少女がいた。

「何故脱いだ」

その言葉に少女はスイッチが入ってしまったらしい。顔を真っ赤にして犬歯を剥き出しにして上条に飛び掛かる。

「あらよつと」

しかしその噛み付き攻撃を上条は少し横に飛んで回避する。

悲運な事に飛び掛かった勢いを殺す方法が無い少女は床に思い切り腹打ちをしてしまった。

「テメエみたいなお子ちゃまが俺に喧嘩売るなんざ百万年早い。とつと服着て出ていくんだな」

ばさり、と床に伏せている少女に修道服を投げ付ける。

「うううううう……ごはんを食べさせずに全裸にした上に追い出すなんて鬼畜すぎるんだよ」

「はっ、不法侵入した身分で良く言うぜ。それにその修道服もう一回着れば全裸じゃなくなるだろうが」

「確かにそうだね。分かった、出ていく」

「よしよし、素直な子は上条さん嫌いじゃないですよ」

いそいそと修道服を羽織始める少女へ上条は作り笑いを浮かべる。

「だけど外の人に君が私を全裸にした上に床に叩き付けたって言うてやるんだよ!!」

「待てコラアアアアアッ!?!」

玄関へと思いつきりダッシュしようとした少女の腕を上条は思い切り掴む。

警備員に問い詰められても弁解出来る余地はあるかもしれない。

しかし、とてつもなく不幸めんどくさいな事になるのは確かである。

ならば、どうやってこの事態をどうやって收拾させるか。口封じが一番有効な手だと思うがその為に殺すわけにはいかない、というか殺すなどもはや良心以前の問題だ。

上条は頭をフル回転させる。

結局食べ物を与えるという事で收拾は付いた。

少女が握り寿司を食べている間に制服に着替えた上条はテーブル

越しに少女と対面する。

飯食わせて直ぐにおいだしても何だか一悶着ありそんな予感だったので上条はとりあえず会話をしてみる事にした。銀髪少女の正体も何だかなで少し気になるし。

「ところでお前の名前って何なんだ？」

「そういえば自己紹介がまだだったね。私の名前はインデックス、
って言うんだよ？」

「目次かよ妙な名前だな。俺は上条当麻^{かみじょうま}。別名『疫病神』です」
「疫病神？」

「はい、大勢の人達から嫌われています」

「……？ そんな風には見えないんだよ？」

小首を傾げるインデックスを見て上条はかなり虚しい気分になる。
今関わったばかりの奴にそんな事言われてもな、と。

「俺ともう少し関わってみたら分かるさ……んで、何でお前は俺の
ベランダにいたわけ？」

「屋上から屋上を飛んでる最中に背中を撃たれちゃってね。飛んで
る時に落っこちちゃったんだよ」

「なるほどねえ。というか何で追われてたの？ 食い逃げ？」

意外とハードな生活を送っているのか？ と段々本格的にインデ
ックスに興味が湧いてきた上条は気付けば会話にのめり込んでしま
っていた。

「さすがにそれは失礼すぎるかも。追われてたんだよ」

「何に？」

「魔術結社だよ」

インデックスは儚げな感じで微笑みながらオカルトなワードを当
たり前みたいに繰り出した。それを聞いた科学の住人の上条は。

「ふーん。魔術ねえ」

あつさりとそれを受け止めた。

他の住民だったら「コイツ頭おかしいだろ」くらいの台詞を吐きそうだが、上条は違った。

超能力なんて力があるんだから魔術なんてオカルトが実在しててもおかしくないんじゃない？ くらいの認識だが上条は魔術という存在を否定しなかった。

「それで魔術結社に追われる理由は？」

「私は名前の通り禁書目録インデックスだから。私の頭の中にある一 万三冊の魔道書。それが連中の狙いなんだよきつと」

「相当頭に詰め込んでるなーその記憶力を俺に分けてほしいぜ全くん？ つー事は、お前は完全オカルトな人ってわけか」

「うん。……うん？」

「という事はお前の修道服も魔術が使われてたりするのか」

さつきまで刺繍で繋がっていたが今は安全ピンで布と布を繋ぎ合わせている修道服を見ながら上条は質問する。

「そうだよ。あれは『歩く教会』っていう極上の防御結界なんだよ

……でも何故か壊れたんだよ防御力は法王級なのに」

「あーそりゃ俺の幻想殺しのせいだな」

「へ？」

上条は右手をインデックスに向かって突き出す。まじまじとそれを見つめるインデックスだったが小首を傾げる。

「コイツは異能の力なら何でもぶち殺します。俺が日頃不幸なものこのクソツタレな右手のせいだそうです」

「し、信じたくないけど。実際『歩く教会』は壊れたし、信じるしかないんだよ……」

苦笑いをした後、インデックスはスクツと立ち上がった。

「そろそろ出ていかなきゃね。絶対防御が壊されて逃げるリスクが高くなっちゃったけど」

「言っておくが、俺は歩く教会とやらを壊した責任を取る気ねえぞ」

「別にいいよ。ってというか私に親切にしてくれた人を巻き込みたくないし」

「おっ。中々いい考えしてんなお前。災厄を持つてる奴はなるべく人と関わるのを避けるに限る」

ニヤリと上条は口端を吊り上げる。

「何だか知らないけど誉められたんだよ。あ！おすしおいしかつたんだよ、ありがとう。……じゃあねっ！」

インデックスは上条に屈託の無い笑顔を向けた後、玄関へと走って向かっていく。

「待てよ」

その背中に上条は声を掛ける。

インデックスが振り向くと彼女の頭に修道服のフードが投げ付けられた。

「忘れ物だ。それ右手で触ってないからヘルメット代わりにはなると思うぜ」

「ありがとうなんだよ」

そして今度こそインデックスは玄関を開けて外に出ていった。

「しかしまあ」

自分一人になった空間で上条はポツリと呟く。

「何年ぶりだろうな。両親以外にあんな嘘偽りの無い笑顔を向けたのは」

七月二十日（後書き）

この小説の上条さんはパワーアップします

七月二十日 2

上条当麻が疫病神扱いされ始めたのは彼が小学校に行き出してからの事だった。

そして彼が八歳の時、事件は起こった。彼の人生を変えてしまうような大きな出来事が。

それは近所の上条当麻を疫病神として特別忌み嫌っていた主婦が彼の腹部を包丁で刺すという小学一年生には……いや、成人だったとしても、あまりにも酷^くすぎる出来事だった。

幸い命には別状は無かったが、この事態を本当に深刻に受け取った上条当麻の両親は彼を『学園都市』に住ませる事を決意する。

せめて不幸を含むオカルトとは無縁な科学の都市で過ごしてほしいという願いを込めて

学園都市での生活が本格的にスタートしたのは上条当麻が九歳になった春だった。

上条は自分が前に居た場所の時みたいに自分が嫌われないようにする方法を入学前から考えていた。

そして思い付いた方法は困っている人は勿論、周りにいる人達みんなに親切にする事だった。行動力が高い上条はそれを早速行動に移した。

しかし、この科学の都市でも『不幸』という災厄は上条から払拭される事は無かった。

彼の努力は全く実らず、上条の周りの人間も不幸な出来事に巻き込まれ、結局、上条を避ける人間や彼を嫌う人間は増えていくばかりだ。

それでも上条は諦めず、周りの人間に親切にする事をやめなかつ

た。偽善だと分かっていたとしても。

そんな風に過ごし、中学生二年生のある日、上条はいつも通り親切で怪我をしていた同級生の治療をしようとしたのが、断られ、こう言われた。

「この怪我也……全部お前のせいなんだよ。疫病神のテメエが人に親切にしようとしたってなあ！ 不幸な出来事が起きるのは全部お前のせいなんだから気持ち悪いだけなんだよ偽善者！！ ……テメエみたいな疫病神はとつと死んじまえ！！」

結局、補修で最終下校時刻まで上条は残された。

「イライラするなあ。今もし誰かに喧嘩吹っ掛けられたらマジで殺しちゃうかも」

夕方とはいえ、気温は高いままだ。終バスを逃してしまった上条は茹だる暑さの商店街を歩いていた。

「ん？」

「あっ」

なんか進行方向にいた少女と目が会っていた。それも、常盤台のE-1で学園都市第三位の超能力者《レベル5》の御坂美琴である。

「……………」

「……何だよ」（この前脅したのにまだ俺に喧嘩売るつもりか？）
いつもと違って妙にモジモジしている美琴に上条は怪訝な感じで
問い掛ける。

「……あ、のさ。あ、あのですね。か、上条センパイ」

「せ、先輩？ 悪い御坂。気持ち悪くて俺鳥肌立ったわ」

「き、気持ち悪いっ!? でも年上に謝る時は敬語を使うのが基本ではないのですか?」

「今までずつと電撃飛ばされてて突然、敬語使われても薄気味悪いだけなんだが。要するに、お前もう色々遅いんだよ」
「そんな……」

崩れ落ちる美琴。だが、上条はそれに対して冷めた目を向ける。
俺のストライクゾーンは後輩キャラではなく寮の管理人タイプのお姉さんだと。

「で、用件は何だよ。くだらない用事だったら……なあ?」

「ひっ! あ、えと、この前の粗相の御詫びにこれを」

美琴は恐る恐ると学生鞆の中から何かを取り出してそれを上条に差し出す。

「何だこれ」

「駅前のデパートで売っている高級クッキーなんだけど……」

「へえ」

上条はアルミ製のクッキーが入った箱を掴み取ると、進行方向へとそのまま歩いていく。

その後ろ姿を美琴は見送る事しか出来ない。

「有り難くもらっておくぜ。お嬢様がわざわざ選んで買ったクッキーならさぞかし美味いんだろうしな」

上条は背中を向けて箱を片手で振りながらそう言った。

その言葉を受けた美琴の顔がぱっと輝く。が、

「あっ!」

「あ」

手が滑ったのか、上条の手からクッキーの箱が離れて宙を舞う。

しかもそれはちょうど上条の隣を歩いていた人へ。

「気を付けるよ?」

見事、その人は飛んできたクッキー箱をキャッチした。

上条より身長が十センチ程高いホストみたいな成りをした茶髪の男は上条にクッキー箱を渡しながらそう言った。

「すまんね」

「ほつ……」

思わず溜め息をついた美琴だった。

自分の住む学生寮の前に白い何か転がっているのを上条は確認した。

近付いて見てみるとそれは今朝自分が会ったインデックスと名乗っていた少女だった。空腹で倒れているわけではない事も上条は直ぐに理解した。

彼女の背中にある横に一闪といった感じに切り裂かれたような深い傷と自分の右手を見比べてから上条は小さく笑った。

「ほら、俺に関わるとろくな事にならねえ」

確か、彼女の着ていた修道服は絶対防御の機能があった事も上条は思い出す。インデックスの言う事がどこまで本当だったかは知らないが、右手で反応があったという事は何らかの異能の力が働いていた事は確実だ。

それを自分がぶっ壊してしまったという事も。

「そんな事……ないよ?」

「……!」

「だっ、て……君は私に……ご飯を食べさせ、て……くれたんだよ?」

「アホかお前。背中斬られるのご飯でご飯選ぶなんて本当にアホだな」

インデックスに糾弾されると思っていた上条は思わず安堵した声を出していた。

それに気づいた上条は自分を殴りたく衝動に駆られた。何て情けないんだ、と。一瞬そう思ったが上条はそれを振り払った。

「お前の死体が俺の寮の前に転がっていると色々面倒な事になりそうだからな。救急車は呼んでやるよ」

「駄目……だよ」

「何でだよ」

「私は魔術サイド側の人間だから……科学サイ、ドの施設に送られたら、何され、るか……分からないんだよ」

「じゃあこのまま死にたいのか」

「私は放つて……置いて大丈夫。必ず回収……しにくるから。心配してくれて……嬉しいな」

訳が分からない、と上条は思わず呟きそうになった。

お前がこうなる要因を作ってしまったのは俺だろ。

そうならば何故お前は俺を責めない、何故笑ってられる？

「回収って誰が……まさか」

「うん？ 僕みたいな魔術師なんじゃないかな？」

七月二十日 2 (後書き)

今回はあまり鬼畜では無かったですかね？
とりあえず今の上条さんは「敵には」とことん敵しい設定です

「っ!!」

上条は突然掛けられた声に思わず飛び退く。

声を掛けた赤髪の黒い神父服を着た男はその隙に、インデックスの前に立ち塞がるかのように彼女の前へと移動した。

「魔術師か。お前ってコイツを追ってた魔術結社の人間だったりするの?」

「……………どうしてその事を知ってるのかな。禁書目録が君に話したのかな?」

「禁書目録……………かお前ら魔術結社は一万三冊の魔道書が頭の中にあるコイツの事をそう呼んでるわけか」

「はあ……………そこまで彼女は話してしまっているわけか」

口にくわえていたタバコを手に取りながら男は小さく笑う。

「本来なら初対面の相手にはステイル^{II}マグヌスと名乗っておきたかったところだったけど、ここはFortis931と名乗っておこうかな」

「なんだそりゃ、魔術結社がお前を管理する番号か何かか?」

「魔術を使うときに名乗る魔法名という物なんだけどね。今は、そうだな 殺し名っていう意味で受け取ってもらえるかな? 君は不幸な事に色々知りすぎてしまったみたいだ」

魔法名とやらを名乗ったステイルという男は手に取っていたタバコを放り投げる。

「炎よ 巨人に苦痛の贈り物を」

ステイルの前に一直線に炎の剣が生み出される。その灼熱の炎剣をステイルは笑いながら、棒立ちの上条に叩き付けた。

対して上条は薄く笑いながらその炎剣を右手で振り払った。

「なっ……！？」

思わず後ろに退きそうになったが、すぐ後ろにインデックスがいる事を思い出したステイルは慌てて踏み止まる。

「その反応……魔術師でもやっぱりコイツは知ってる奴って少ないのか？」

右手をステイルに見せつけながら上条はつまらなそうにそう言う。

「馬鹿な！？ 摂氏三度の炎の塊だぞ！？ 右手一本で受け

止められるわけが……ッ」

「簡単に説明してやると俺の右手はどんな異能の力でも打ち消しちやいます。分かってくれたかな？」

「どんな異能の力でも……だと……まさか彼女の『歩く教会』を壊したのは……！？」

「はいはいインデックスの修道服に右手で触れたのは俺ですよ。本来なら今はお前やインデックスに引け目を感じちまう状況かもしれねえが」

右拳を握りしめた上条はステイルに向かって駆け出す。

「生憎、今日はすつげえ苛々しててなあ。喧嘩吹っ掛けてきた不幸はぶっ飛ばさなきゃ気が済まねえんだよオ！！」

「く……ッ！」

あの少年と初めて対峙した時は何でも無いただの学生のように見えていたのに、今はとんでもない化け物に見える。

あの少年が異能の力を打ち消す右手を持っていたとしても、突然魔術をぶつけられても全く動じず、笑っていられるのが異様に恐ろしい。

「世界を構築す」

「おっせえんだよ」

上条の放った右ストレートがステイルの頬を捉える。

ステイルの体はインデックスの上を通過して三メートル程吹っ飛んだ後、地面に激突した。

ステイルをぶん殴って数秒経った後、上条は思わず額に手を当てる。

「あーあ。何やってんだよ俺」

思えばここでステイルとかいう魔術師にインデックスを素直に引き渡してたら事は終えてたかもしれないのだ。

全く、普段の自分らしくない。

「いや、違う。俺は普段通りだ」

ステイルを殴り飛ばしたのは、アイツが先に魔術で自分を殺そうとしたから。条件反射みたいな物だ。

いつも通りの短気で他人のためなんかは身を削らない人間、上条当麻だ。なのに何故、インデックスに関わる結果になってしまう？

「クソつたれ。気持ちが悪りい」

上条はその場に屈んで倒れているインデックスの横顔を見る。

「放っておいても死にそうだな本当に」

インデックスの背中の中の傷口と憔悴しきった顔を見ながら上条は小さく溜め息を吐いた。

ここでコイツを見捨てればどうなるか。

また魔術結社に戻されるか、死ぬかの二択になる可能性が高い。でも、あそこで転がってる魔術師は後数時間くらい目を覚まさないだろうから、死ぬ可能性が高いか。

「……………」

見捨てるしかないのかもしれない。

彼女の話からすると病院に送れば、死より悲惨な目に遭うかもしれない。でも、病院が使えないならもう自分に打つ手など無い。

それに根本から考えてみると、確かにインデックスの修道服の防御機能を破壊したのは自分だ。

だが、勝手に自分の部屋に入ってきたのもコイツだ。ちゃんと不法侵入という事も忠告した。

もしかして、インデックスを見捨てても俺には非は無いんじゃないか？

「もう、いいよ……」

「ッ！ お前まだ……！？」

インデックスが未だに意識を手放して無かった事に上条は動揺する。これから見捨てようとしていた人物に怨みの全く込もっていない瞳を向けられたのも驚きだった。

「これ以上私と関わってたら君まで危険な目に遭っちゃうんだよ……」

…私は君から離れるべきなんだよ……」

「……あ」

その台詞を聞いた途端、思わず上条は震える右手をインデックスへと近付けようとしていた。その事に気付いた上条は慌てて右手を引っ込める。

あの台詞と、そっくりだ。

自分が九歳の時、唯一、友達と呼べる存在だったアイツが最後に言い放った台詞にそっくりだ。

白い髪に白い肌、だけど瞳は赤色の目立つ容姿をしていたアイツ。いつも悲しそうな顔をしていたけど一度だけ自分に笑顔を見せてくれたアイツ。

『俺を恐がらないのは嬉しい。けど、このまま俺と一緒にオマエがいるとオマエに危険になってしまう。だから、俺はオマエから離れるべきなんだ』

そう言ってアイツは自分の前から姿を消した。

アイツは何も悪く無かったのに、悪いのは災厄を撒き散らす俺だったのに。

でも、その災厄の原因の右手のおかげで出来た唯一の友達だったのに

「ああああああッ!!!!!! 自分勝手過ぎんだろ……アイツも、お前も……ッ!」

上条はインデックスを抱き起こして背中に背負った。その顔は憤怒に染まっている。

「な、何を……!!?」

「黙ってる!!!」

勝手に体が動いてしまった。そのまま上条は魔術師から逃げるように駆け出す。

この日、上条当麻は久々に本気でキレた。

七月二十日 3 (後書き)

上条さんを小学生低学年で学園都市に行かせた設定の意味は今回のラストにあった唯一の友達のためです

あとスタイルはリベンジがしたいようです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6945u/>

とある災厄の幻想殺し《イマジンプレイカー》

2011年11月8日03時10分発行